



初代社長 瀬古 新助氏



二代目社長 瀬古 隆三氏



三代目社長 瀬古 一郎氏

330人ほどで、過去20年間の250人レベルを大きく上回っている。大きな前進だ。そのほとんどが技術者たちで、この会社がいかん技術者集団であるかが分かる。

どんな地上建造物でもその安全性は、地下地盤の安全性によって決まるといっても過言でない。地下の土質・地質を調べずにダムでもビルでもつくれない。仕事は地味でも、また利益率が低くても需要は絶対になくならない。

実は、筆者とこの会社との出会いは古く、初代の瀬古新助氏からである。その後、二代目の隆三社長、三代目一郎社長と三代にわたっての付き合いになる。恐らく筆者一代で親子三代の企業経営者と付き合ったケースは他に類例がないだろう。

そもそもの出会いはこうである。創設一代目の新助社長と、本誌の名付け親でもある大来佐武郎先生（大平第2次内閣の外相）は三重・松阪の出身で、戦前の通信省時代には中国でのダム・電力開発で東大電気学科の大来先生と日大水利の新助社長が同じ釜のメシを食べた仲であった。

筆者と二人の関係は、大来先生が1978年夏の参議院全国区から立候補した時に、新助社長に陰に陽に助けてもらったことから始まった。その時、筆者は選挙事務局長を命ぜられ、カネ集め、票集めに東奔西走した。そして、その私を新助社長が支えてくれた。

初代の新助社長が早くから海外に目を向けたのも、戦前大陸での経験が根っこにあった。古くは独自に大来先生の紹介でアジア開発銀行（ADB）の仕事アジアで手掛け、次いでブラジルの上下水道公社との関係を結び、二代目隆三社長の時代にブラジルの上下水道公社と本格的な関係に入っている。三代目一郎社長は目下、中国に子会社を設けて、大陸の大地にクサビを打ち込む計画である。特に、四川大地震の研究から斜面防災（ガケ崩れなど）に力点が置かれている。

三代俯瞰図

三代を俯瞰すると、初代の天才的ヒラメキと抜群の行動力に対して、二代目隆三社長はまさに研究者タイプで、先にも述べたように

多くの技術的特許財産を残している。また、人格は温厚で公益に尽くすことが多く黄綬褒章、勲四等瑞宝章などを授与されている。

初代新助社長と三代目一郎社長は、一郎氏の東大時代、よく「会社を大きくすべきか、小さくすべきか」を議論した。三代目が「やはり大きくすべきでしょう」と言うのと、初代は「少数精鋭という方向もある」という考え方を提示したと言う。初代の新助社長には、周辺に事業を支える重厚な人脈が形成されていた。だから、事業体は少数でも企画力、研究力、経営力などがあれば外部の人脈、ネットワークの力を借りて、大企業なみの実力を発揮できる。外部の人脈形成、その重層的なネットワークが初代の目指した経営戦略だったのではないだろうか。

三代目一郎社長は先代たちのDNAを引き継いでいる。初代の経営力、二代目の研究心に加え、技術者を大切にしている。なんと、三代目は初代からの累積債務を完済しているから驚きだ。まさに努力の人である。だから、この会社の未来は明るい。